

(資料) 中国文学批評通史序論訳注シリーズ 付録第四篇

王運熙《唐宋伝奇と古文運動の 関係試論》訳注

甲 斐 勝 二*
東 英 寿**

前書き

今回翻訳するのは、《中国文学批評通史》の主編者の一人王運熙先生の文学史への視点を示す論文である（以下王論文と略称）*1。この論文は、1957年に発表されたものである。論者は当時まだ復旦大学で講師でありながら、当時の中国文学研究者の中で既に確固たる位置を占めていた鄭振鐸（中国科学院学部委員）・陳寅恪（中山大學教授）・劉大傑（復旦大學教授）といった錚錚たる学者を向こうにまわして、伝奇文と古文の文体の差異からその関係について見解を述べたもので、現在では概ね王論文の主張が認められていると言って良さそうだ*2。論者の文体への感覚の敏感さを物語るものでもある。

日本では、かつて近藤春男氏が『唐代小説の研究』*3で、この論文にふれ、「古文運動を軽視しているのには従えない」、「魯迅の説によりつつ、しかもそれを誤解している

* 福岡大学人文学部教授

** 九州大学教授

*1 《中国文学批評通史》は全七巻、上海古籍出版社。《通史》としては2011年の出版だが、それまで王運熙・顧易生の両先生の主編により出版されていた各時代の批評史をまとめたもの。中国の古典文学批評研究の一成果として評価は高い。

*2 現在の唐代伝奇小説に関する説明では、古文運動との関係を強く語るものは見かけなくなっている。たとえば《唐人小説》（汪辟疆 上海古籍 1978・1）の出版説明や序では、小説のジャンルが科挙と関係があることは説かれていても、古文運動との関係には触れていないし、《中華文学通史》第二巻（中国社会科学院文学研究所・少数民族文学研究所 1997・9）唐五代時期文学第十四章唐代伝奇小説では、その発達の原因として上げるのは、漢魏六朝以来の小説の創作経験の蓄積と唐代の経済録の発展からくる市民の娯楽の需要の二つである。なお、王運熙先生は2014年に逝去されている。

*3 『唐代小説の研究』第一章第一節：笠間書院（1978.12）。

のからも従えない」と批判されたことがあった。この批判は、唐代における伝奇小説の隆盛と「古文運動」の関係を密接に捉えようとするところからくるものであるが、王論文が目指するのは後世に伝奇小説といわれる唐代の文学ジャンル及びそのスタイルが独自の源流を持って発展してきたもので、韓愈の主張する古文のジャンルとは別に起源を考えるべきだということであって、古文運動の影響がない（この古文運動なるものを如何に考えるべきかは、後に述べるとして）、ということではない。伝奇小説の勃興と韓愈の古文の主張は、同じ時代に起こったことなので、当然個人としては何らかの形で関わることはあるとしても、そのジャンルの関係を従属関係や派生関係でとらえるのは間違っているという主張なのである。たとえば、文中では、「中唐の伝奇の中で、沈亜之の《湘中怨辞》、《異夢録》、《秦夢記》は、文章が比較的簡約で飾りもない。これはまさしく彼が韓愈の門弟であったが故に、古文の影響を受けたためかもしれない」と述べ、「韓愈・柳宗元もこの流行の影響の下、(小説の作成に)手を出してしまった」と述べられており、同時代の個別の作者に関する伝奇のジャンルとの関係を否定しているわけではない。その文体から見ると、「彼らの小説は寓意を重視し、文辞は簡潔古雅で、伝奇の代表作とできるものではない。なぜならば、伝奇は物語の展開を重視して、文辞は細やかで濃艶であり、それは古文の風格とは対立する」ものとして別の創作ジャンルとして分けて考えるべきだ、というのがその結論なのである。したがって、ジャンル論から語られる魯迅の言葉の理解として、指摘されるような論者の誤解はないはずだ。

王論文発表当時に見られた古文運動による散文制作の主張と唐代小説を結びつけるという視点が生まれた原因はおそらく以下の理由に依るのであると推測している。つまり、五四運動から中華人民共和国の成立に伴って、中国では過去の文学遺産への評価が始まり、貴族的な素養が求められる駢儷文から「市民性」を持つ散文への評価が高まって、唐代に盛んになった所謂近代文学の中心となる「散文小説」の文学史上での位置づけを急ぎ、漢魏六朝から続く散文記事である伝奇小説と韓愈や柳宗元の提唱する古文を共に散文であるという理由から、そのジャンルとしての文体特徴の差異に注意することなく結びつけ、駢儷文への対抗を強調しようとする気持ちが潜在的にあり、それが鄭振鐸の説を受け陳寅恪・劉開榮・劉大傑と続く伝奇と古文を結びつける発想を強めたのだと思われるのである。だとすれば、そのような動きに冷静に反応したところにも王論文の価値があると訳者は考えている^{*1}。

*1 この問題点の当否については五四運動から中華人民共和国に続く文学史研究の視点

ところで、本論文に関連して、中国文学史に言う所謂「古文運動」について、訳者による見解を以下に些か述べておきたい*1。

従来の「古文運動」の研究において、所謂社会性を伴う「運動」として検討するのであれば、そこで必要とされる視点として次の二つが挙げられよう。

- (1) 古文運動は具体的にはどのように展開されたものなのか。
- (2) 古文運動は社会に対して如何なる影響を与えたのか。

ところが、これらのことが「運動」と言う言葉を使う上で、従来あまりにも漠然とし過ぎていたように思われる。そこで、幾つかの先行研究の記述からこれまでの「古文運動」に対する認識について確認したい。

銭冬父氏の『唐宋古文運動』では、その冒頭で「古文運動」について次のように記述する*2

（古文運動は）、散文を提唱し、当時の駢文に反対した闘争運動である。この闘争に参加した人数は非常に多く、共同の一致した要求と目標があり、相当規模の潮流を形成し、長期の起伏奮闘を経て、遂に勝利を得たので、よって人々はそれを文学史上に発生した「運動」と称するのである。

ここで言う「共同の一致した要求と目標」や「長期の起伏奮闘」とは具体的には何を指しているのだろうか。「古文運動」は本当に一致団結して共同で長期間展開されていたのだろうか。

また、祝尚書氏は『北宋古文運動発展史』の中で「古文運動」について次の如く述べる*3。

唐宋古文運動は……前後三百年余に渡る困難な闘争を経て、最後に輝かしい勝利を得て、我が国の古代散文創作の最高峰に到達した。……唐代古文運動は北宋古文運動の輝く手本で、思想と力の源泉であり、それは北宋古文運動を極めて大きく推進させた。

と共に今後考えてみたい。

*1 以下、訳者の「古文運動」に関する見解は、東英寿『歐陽脩古文研究』（汲古書院、2003）「序説 北宋古文復興研究への視点」6頁～12頁の記述に基づいており、本訳注に記載するに当たり、一部加筆、文章修正を施した。

*2 銭冬父『唐宋古文運動』（上海古籍出版社、1979 新一版）1頁の記述。

*3 祝尚書『北宋古文運動発展史』（巴蜀書社、1995）1頁の記述。

「三百年余に渡る困難な闘争」とは、如何なる形態の闘争が三百年間の長きにわたり継続していたというのであろうか。確かに唐代の古文の文章は宋代の古文の手本となつたであろう。ただ、五代の戦乱によって、従前の門閥貴族が没落して成立した宋王朝では、科挙出身の士大夫が支配階級を形成することとなり、唐代とは文化の担い手が異なっている。このような宋代社会において、唐代の如何なる運動の形態を手本とし得たのか、大いに疑問が残る。

また、『中国の文学論』に収められた松本肇氏の「唐宋八大家の世界」では次の如く述べる*1。

唐代古文運動は晩唐の李商隠（八一三—八五八）によって終止符を打たれる。

ここで疑問に思うことは、李商隠はどのような方法で、いかなる手だてを使って、唐代の「古文運動」に終止符を打つたのかということである。運動に終止符を打つ以上、李商隠は何らかの形で社会や世間に対して、力を行使せねばならないと思われるが、果たして李商隠は社会に対して何を行い、どのようにして「古文運動」を終わらせたと言うのであろうか。

これらの記述に共通することは、当時の古文復興の実態、言い換えると社会に対して如何なる働きかけを行い、それがどう具体的に展開されていたのかを明らかにせず、「古文運動」という語句を用いることで、それらを曖昧なまま包み隠してしまったということである。

確かに、宋代の例で言えば、韓愈の古文をモデルに自らも古文の作品を作り、それを後世に伝えたという、古文作成の繋がりは迎れるが、それは古文の作成過程における影響関係であり、それを以て運動と呼ぶことはできないであろう。更に、古文作成の影響・繋がりの指摘だけでは、社会に対してどのような働きかけをしたのか、社会構造の中で「古文運動」が如何に取り込まれていたのか等が全く明らかにされていない。つまり、「古文運動」という言葉が当時の文学情勢を考察する際にひとり歩きしている感が否めないのである。これまでのように文人間の影響・関連を跡づけ、古文を作成していた文人達を時代順に並べるだけでは、古文復興の実態は全く浮かび上がってこないと言えよう。

*1 松本肇「唐宋八大家の世界」（横山伊勢雄、伊藤虎丸編『中国の文学論』（汲古書院、1989）所収、148頁の記述）。

そこで、「古文運動」という概念がいつ生まれてきたのかということについて考えてみたい。その際、大いに参考になるのが羅聯添氏の「論唐代古文運動」における次の指摘である*1。

「古文運動」の名称に至っては、清代以前にはなかった。所謂運動は必ず一個の団体が計画を立てて行う種々の活動である。たとえば、文字や口頭による宣伝などである。唐代古文家は、古文に対して僅かに個別に唱え導くだけで、せいぜい若干の人が呼応追従したに過ぎず、実際は如何なる運動ともならなかった。「古文運動」は近代人が当時の風潮の影響を受けて作り出した一個の名詞である。中国文学史上、最も早く「運動」という名詞を用いたのは、民国十七年（一九二八年）出版の胡適「白話文学史」である。……三年後、民国二十年（一九三一年）の胡雲翼「中国文学史」第十一章の標題は「唐代的文学運動」であり、「古文運動は韓柳二氏の努力によって、最高の発展を成し遂げた」と称す。民国二十一年（一九三二年）に鄭振鐸が「中国文学史」第二十八章に「古文運動」を以てタイトルとし、唐代の「古文運動」の発展と成就を討論するに到り、この後「古文運動」は一個の普遍的に使用される名称となった。

「古文運動」という名称は、一九二八年の胡適の文学史の中で初めて登場してくる。その影響を受けた胡雲翼や鄭振鐸の中国文学史に用いられ、以後文学史に定着する。

胡適は一九一五年九月の『新青年』創刊に始まる五四の新文化運動を推進した人物で、当時は政治が文明全体の変革を求める以上、文明の中心的地位を占める文学と政治は密接不可分の関係であった。胡適以外にも陳独秀等の主張が政治に影響を与え、実際に運動が展開されていた。特に胡適は、清末に米国に留学して在米中に『新青年』に寄稿し、新文学は白話文・口語文で書かれるべしという口語文運動を実践していたのである。そうした趨勢の中で、胡適が中国の古典を振り返って、「古文運動」という概念を構築したことになる。そして、彼が提出した「古文運動」という名称は、以後各種の文学史に取り入れられ一気に定着してしまう。

つまり、「古文運動」という名称は、唐代の韓愈や柳宗元、宋代の歐陽脩や蘇軾をはじめとする唐宋の古文家とは全く関係がないのである。羅聯添氏が言う様に、運動とは

*1 羅聯添「論唐代古文運動」（台湾学生書局『唐代文学論集』所収、1989）。初出は『韓国中国学報』第二十五輯、1985。

団体が計画を立てて行なう種々の活動であるので、唐宋時代にそうした運動はなかったことは明らかであろう。ところが、当時の実態を詳しく検討することなく、「古文運動」という語句が文学史を把握する上で、これまで決まり文句の如く用いられてきた。ここに、「古文運動」という名称の持つ錯覚が生まれることとなった。

また、小野四平氏はその著書『韓愈と柳宗元』の中で次のように述べる*1。

中国文学史の概説書は、「唐代古文運動」について記すのが通例となっている。韓愈や柳宗元の文章に関心をもつようになってから、私は、いつしかそのような「運動」に対する漠然とした疑問を持つようになっていた。近年になって、そのような運動が実際には存在しなかったのだと考えることによって、はじめて当時の状況がよく見えてくるのだと感じられるようになった。……駢文から古文への文体変革のいきおいが、文字通りの「文学運動」として、そのように呼ばれるのにふさわしい内実を獲得するのは、恐らく歐陽修から以後のことだと考えられる。(15頁)

もしも盛唐から中唐にかけての「古文運動」なるものが、明確に自覚された理念と、それを支える中核集団によって推進されていたのだとすれば、そしてその運動が広汎なる支持を得ていたのだとすれば、それがこのように急速に衰えてしまったことについての説明が必要となるであろう。けれども、実際にはそのような説明をつくることは不可能であろう。駢文から古文への文体変革へのいきおいが、文字どおりの「文学運動」として、そのように呼ばれるのにふさわしい内実を獲得するのは、恐らく歐陽修から以後のことだと考えられるからである。韓愈と柳宗元においてもそうであったように、唐代においては右のような文体変革への動きは、まだまだ少数の人びとによる、偶然性の高い試みにすぎなかったようである。(25頁)

ここには、実に示唆に富む指摘がなされている。それは、唐代古文運動が実際には存在しなかったという結論に到達していることと、文字通りの文学運動としてそのように呼ばれるのにふさわしい内実を獲得するのは、宋代の歐陽脩から以後のことだという指摘である。

まず、後者について考えてみたい。小野氏が言う「文字どおりの文学運動」とは一体どういう運動を思い描けばよいのであろうか。該書では「文字どおりの文学運動」の実

*1 小野四平『韓愈と柳宗元－唐代古文運動研究序説－』（汲古書院、1995）。

態や中身が明確には提示されない。ここはおそらく、多くの他の考察と同様に、当時「古文運動」という文学運動が存在するという前提に立って記述がなされたために、その実態の検討がないまま、こうした記述になったのだと考えられる。該書は韓愈や柳宗元を詳細に考察することを目的としているので、残念ながら宋代の歐陽脩に関する具体的考察はなされず、歐陽脩が文学運動としての「古文運動」を展開したという所論は先行の旧説に依拠したものとと思われる。従って、歐陽脩が「文字どおりの文学運動」を展開したというのは、説得力を欠くものと言わざるを得ない。

いまひとつ注目すべきは、唐代古文運動が実際には存在しなかったという結論に到達されていることである。この結論は、前述した訳者の主張と共通の方向性を持つと言える。ただし、結論は同一であるが、それに至る過程が違っている。小野氏はこれまでのように文学運動としての「古文運動」は存在するという前提に立ち、韓愈や柳宗元を詳細に検討した結果、結局運動は存在しなかったという結論を導きだしている。これに対して、訳者は既に見てきたように、文学運動としてのみの「古文運動」は、その語句の由来や当時の実情から見ても、唐宋時代には存在しなかったと考えるのである。ただ、小野氏の結論は訳者の所論を大いに補強できると考えられる。小野氏は、文学運動としての唐代古文運動は存在するという前提に立ち、韓愈や柳宗元を調べ抜いた結果、実際にはそれは存在しなかったという結論を導きだした。これは裏を返せば、文学運動としての「古文運動」を設定したこと自体に問題があり、既にそれが当時の実態とずれていたことを物語っている。

そもそも、当時の古文家は職業作家ではなく、古文の作成によって生計をたてる事はできなかった。古文家とは科挙に及第した官僚・政治家、あるいは及第前は科挙合格を目指す存在であり、彼らは科挙を通して生まれてきた士大夫である。つまり、彼らが行っていたのは士大夫活動であり、それは自ずと政治活動を中心としたものになる。従って、純粋な文学運動としてのみの「古文運動」を展開しても、彼らにとっては何らその意味や必要性を持たないことになる。当時、古文家達は科挙の及第を目指し、官界に進出して以降は、否応なしに出世や昇進の過程で当時の政治潮流の渦の中に放り込まれることになる。ただ、彼らの出世や昇進を含めた士大夫活動・政治運動と関連して、当時確かに古文の復興という動きは存在していた。それを近代以降に「古文運動」と称したのであって、文学運動としての「古文運動」は唐代や宋代当時には決して存在していなかったというのがその実情だったのである。

王論文では、文学運動としての「古文運動」という前提に疑問は投げかけてはいないが、唐代に発展した伝奇小説と古文運動の関連を重視する当時の有力な研究者達を向こうにまわして、そのジャンルの関係を従属関係で捉えるのは間違っていると明確に主張された。これは当時の研究状況においては新たな説と考えられ、その着眼点は大いに称賛されるものである。訳者とは「古文運動」に対するアプローチは違うものの、本論文は「古文運動」を考える上で、当時の「古文運動」の領域が「運動」といわれるほど大きなものではなかった事を側面から示すものとしても高く評価できるのである。

なお、文学運動としての「古文運動」が存在するかどうかについては、今回の王論文の問題意識とは直接の関係はないので、この前書きでの指摘にとどめ、以下の訳注では触れていない。翻訳は《漢魏六朝唐代文学論叢》（上海古籍出版社 1980）掲載の論文によった。同書の増補本によれば、原載は《光明日報》1957年11月10日《文学遺産》副刊182期とのことである。注釈は、原注と訳注を区別すべき所のみ原注・訳注の語を記した。注記のない箇所は全て訳注である。先生方のご指正をお願いします。

王運熙《唐宋伝奇と古文運動の関係試論》訳注

唐代伝奇は中唐の時代に発達し、韓愈・柳宗元の古文運動*1もまた中唐に起こり盛んになった。伝奇と古文の文体は類似しており、共に散文体であり駢文体ではない。このような現象から、多くの文学史の研究者は伝奇と古文運動に密接な関係があって、伝奇は古文運動の背景の下に発達したのだと考えてしまうことになった。この問題に対して、私はいささか異なった見解を持っている。ここに提示して皆さんに御指正を仰ぎたい。

*1 古文運動：後漢から六朝期に盛んになって行く対句を主として作られる駢儷文の流行に対して、駢儷文成立以前のように散文体で記そうという主張（ただし本来は儒教重視の思想を抜きにしては語れない）。この主張は唐代中期に韓愈・柳宗元によって提唱され、賛同者も出たのだが、結局の所当時の駢文形式の方が読み易く、唐代での駢儷文の流れは変わらなかった。実際、当時の文章では韓愈の文体より時文と称された駢儷文の方が平易通俗なものであり、その有効性があったことが論者によって指摘されている。（《漢魏六朝唐代文学論叢・韓愈散文的風格特徴和他的文学好尚》上海古籍出版社 1981）。

一

鄭振鐸先生は《挿図本中国文学史》第二十九章《伝奇文の興起》*1の中で、“伝奇文は古文運動の属国であったが、属国から力を充実させて大国となった”と述べている。その理由は以下の通り。

伝奇文の始まりについて、その源は隋・唐の交代の頃あたりだろうと推測するが、その成長となると大歴（766-779）、元和（806-820）の時代であること疑いがない。隋、唐の交代の頃の伝奇文は、まだ萌芽に過ぎず、大歴、元和の頃になって花を咲かせて実を实らせる時代を迎える。その成長を促したものとして、古文運動が“大きな力をこれに与えた”のであった。そもそも、古文運動が事物を叙述するのに不便な駢儷文の打倒を始め、それとともに素朴で飾り気のない古文に文芸の形態を加え、可能な限り美を目標にして歩き始めさせたのだ。伝奇文は、このような古文運動が盛んな時代に生み出されているのだから、その間の状況は当然はっきりと分かるだろう。伝奇文の著名な作家沈既済は蕭穎士の影響を受けていたし、沈亜之も韓愈の門弟であった*2。韓愈自身も遊戯文の《毛穎伝》などを書いている。そのほか元稹・陳鴻・白行簡・李公左の諸人は、皆な古文運動と直接的或いは間接的な関係がある。従って、伝奇文の活動は、古文運動の一支流だと当然見なすべきことになるのだ。

鄭先生の《挿図本中国文学史》は解放以前の中国文学史の著作の中で大変重要な作品であるので、その中での唐代伝奇と古文運動に対する観点は、やはり大きな代表性を持っている*3。鄭先生が唐代伝奇と古文運動との関係を断定した時、その主な根拠は以下の

*1 鄭振鐸（1898～1958）《挿図本中国文学史》は1932年の序文及び例言がある。指摘されるように定評があり、現在でもまだ出版されている。今回の訳注で参照したのは中国社会科学出版社民国学術經典叢書の中の一冊で2009年の出版。

*2 （原注）考えるに：《新唐書》卷202《蕭穎士伝》に：“穎士、子の存は、文辞に巧みで、韓会、沈既済、梁肅、徐岱等と親しかった”とある。沈亜之が“曾て韓愈の門に遊んだ”こと、《群齋読書志》と《唐才士伝》に見える。

*3 （原注）劉大傑先生《中国文学發展史》上冊第十二章四節の視点も鄭先生と同じである。二書は共に解放前に出版されたもので、鄭・劉二人の先生の現在の見方は既に異なる所があるかも知れないが、しかし、このような見方は少なくとも今に到るまで多く

二点であった。第一は伝奇と古文の文体が類似していること、第二は多くの伝奇作者が古文運動と関係があり、古文運動の代表者も遊戯的な文章を書いていることだ。以下では文体と作者という二種の角度から論者の考えを述べてみたい。

まず文体から述べる。初めに指摘しておかねばならないのは、唐代伝奇の文体は漢魏六朝の志怪小説と密接な継承関係があることだ。魏晋南北朝は駢文が盛んであったとはいえ、当時の小説はやはり散文体で書かれていた。干宝の《晋紀総論》（《昭明文選》参照）は対句の多い議論文ではあるが、彼の《搜神記》となると散文体で書かれている。呉均の《與宋元思書》（《六朝文絮》参照）は、人口に膾炙する写景の駢文だとはいえ、彼の《続齊諧記》となると散文体で書かれている。《漢書・芸文志》、《隋書・経籍志》、《旧唐書・経籍志》、《新唐書・芸文志》等の歴史書の図書目録によれば、我々が現在漢魏六朝小説と呼ぶものには、子部小説家類に属すものもあるが、より多数のものが史部の雑史、雑伝記類等の類に入れられている。事象を記録するこのような文は、一般的に文章を装飾する必要はないから、当時の人々は散文体で小説を書くのが通常であった。駢文が得意であった呉均であってもその例外ではないのである。唐代伝奇では初期の《古鏡記》、《白猿伝》から後の作品に到るまで、その言葉遣いは基本的に漢魏六朝の志怪小説とやはりよく似ている。それらの語句はかなり簡潔で引き締まり、四字句が多く、風格は駢文とかなり近いものとなっているが、《戦国策》、《史記》及び唐宋八家文の語句の方は、句の字数はばらばらであって、意味が重複する対句表現をしばしば意図的に避けているので、その隔たりは大きい。よって、唐代伝奇に使用された文体にはそれ自

の文学研究者の意見を代表するものである。

（訳注）原注に引かれる劉大傑の《中国文学發展史》上冊は1941年の出版。第十二章は「唐代文学の新發展」、四節は「唐代短編小説的進展」の題を持つ。そこでは、「韓愈・柳宗元の古文運動によって、素朴な新散文が生み出された。この文体は叙事や事物・心情表現で用いれば、自ずから駢文より大きく勝る。白話文がまだ小説の領域に入る以前、この平易で身近な散文体は、小説の表現にかなり適していた。大歴・元和の小説の作家は、この古文運動の最中におり、その影響を受けている。古文運動の功績は、文体の開放であった。文体の開放は、間接的に小説の發達を促す。同時に伝奇文の發展によって、古文運動に対しても、やはり一定の推進作用を持つ。二つの関係は相互影響的なものだ。伝奇を古文運動の支流と見なしたり、古文運動を伝奇から生まれたものだとすることは、共に一方的な考えである」と記されており、鄭振鐸と類似の視点を示しながら、この二種を互いに影響を与えながら發展したものだと考えようとする。なお、この論文の筆者王運熙先生は、復旦大学中文系を1947年に卒業してそのまま復旦大学に残り当時は講師であった。劉大傑は1950年に復旦大学中文系教授に着任しており、復旦大学では同僚の関係（とはいえ上位の存在者）である。

体の直系の祖先があり、古文運動に力を借りたものではないことが分かる。しかも、六朝志怪小説から、唐初の《古鏡記》、《白猿伝》を経て中唐以後に到る伝奇は、その源流まではっきりしており、途中で断絶はないのである。

ここで触れておかねばならないのが《遊仙窟》で、初唐の武后時代の張鷟^{さく}の作品である。この《遊仙窟》が駢体文で書かれているため、《遊仙窟》の文体こそ初唐小説に通行した文体だと見なし、その後中唐になって古文運動が威勢良く進展した影響によって、唐代伝奇の文辞が散文化に向かうことになったのだ、との錯覚に陥る人もいるかも知れない。しかしながら、このような視点は成立しない。なぜならば、唐初には《古鏡記》、《白猿伝》のような散文小説が生まれていて、《燕山外史》*1 式の《遊仙窟》となると、それが当時の文壇で小説として通行した文体だと証明することができないからである。

唐代伝奇の言語表現が基本的に漢魏六朝小説とよく似ていると述べたが、そこには当然発展があった。一層細やかで生彩をはなち、分かり易くなっていくのである。魯迅先生が《中国小説史略》第八編で、「小説もまた詩と同様で、唐代になって一変した。やはり珍しい話や佚文を集めてはいるものの、しかし叙述が細やかになり、文辞も華やかになっている。六朝期の粗雑で荒っぽいものと比べれば、変化の痕跡は非常に明らかだ」*2 と述べているのは、このことだ。「文辞も華やか」というのは、中唐期及びそれ以後の伝奇の一大特色であって、その「文辞も華やか」な表現の一つが、多くの対句を用いたことである。《沈中記》中の対句は、主に盧生の奏疏に現れているといってもよいのだが、それは当時の公用文の文体の影響によるものである。《柳毅伝》、《霍小玉伝》、《南柯太守伝》、《長恨歌伝》中の多くの対句表現などになると、作者の叙述文の中に見られるようになる。以下に例を挙げてみよう*3。

その話が終わらぬうちに、大声がたちまちおこり、天はくずれ、地が裂け、宮殿は振動し、雲煙が沸きおこった。突然、体長が千余尺の赤竜が現れた。稲妻のような眼、血のしたたるばかりの舌、朱色の鱗、火炎と見まがうたてがみ、頸に一本の金

*1 《燕山外史》：清、陳球の撰。全文を駢儷文で記す文言小説で、現在では《遊仙窟》を継ぐものと位置づけられる。

*2 訳文は学習研究社『魯迅全集』11（1986）による。以下の引用も同じ。

*3 以下の翻訳文は岩波文庫『唐宋伝奇集』（今村与志雄訳 1988）にもとづく。ただし、各作品とも王論文では原文の引用は続けて書かれているが、実際は続いているわけではないので、訳文では改行し箇条書きの形式で示している。

のくさを牽いている。くさに玉の柱を牽き、何千という雷や何万という稲妻がその身体の周囲を激しくまわり、雨・雪・霰・雹がいっせいに降りそそいだ。《柳毅伝》

男からの書状は断絶してしまったが、小玉の想いは変わらず、男の親友に贈物をして、消息を聞き出そうとつとめた。このように思いつめて手段をつくしたから、金もしばしば費い果たした。

風流を解する人士は、皆、小玉の多情に感歎し、義侠心のある人は、李益の裏切りに怒ったのである。《霍小玉伝》

さらに淳于禁に親族や縁者の存否を問い、郷里の移り変わりの模様を訊ねていた。また、道が遠く離れていて、消息がとだえたことを述べ、悲痛な内容であり、一語一語に悲しみがこもっていた。

彼の下男は、中庭で箒をかかえ、二人の客は長椅子で足を洗い、斜めに傾いた日は西の垣にまだ隠れていなかったし、東の窓の下の樽の酒はまだ残ったままであった。《南柯太守伝》

上掲の伝奇作品中では、対句は少なくはないとはいえ、その割合は多いというわけではない。例えば郭湜の《高力士外伝》、袁郊の《紅線伝》などでは、対句の分量が散体をいささか越えているからだ。《霍小玉伝》、《南柯太守伝》、《高力士外伝》は共に中唐で生まれたもので、前二者は伝奇の代表作でもある。これにより、中唐の伝奇が古文運動と時を同じくして発展してはいても、その言語表現は、古典的で素朴な方向へ向かってはいないばかりでなく、逆に華麗な駢儷文の方向に発展していることが分かる。このような華麗な対句は、古文の風格と対立するばかりでなく、しかも漢魏六朝志怪小説及び唐代初めの《古鏡記》、《白猿伝》にはないものである。中晩唐の伝奇は対句が増大するが、それは当時の変文・俗曲などの民間文学の影響を受けた事による。変文俗曲中の対句は極めて多いのだ。中晩唐の伝奇は、過去の小説に比べると通俗化が進み、大衆文学^{*1}との関係もさらに密接になる。対句表現の増加が、まさしくその通俗性の現れな

*1 大衆文学：原文は市民文学。市井・民間で流行した文学として大衆文学と訳した。なお、ここでは「民間文学」もほぼ同様の意味で用いられている。

のである。《遊仙窟》は変文や俗曲の作品を熱心に真似したので*1、全体的に駢儷文となつたのであり、《霍小玉伝》などになると、変文や俗曲など民間文学の影響を深く受けたがために、基本は散文体でありながら、対句がかなり多くなつたのだと私は考えている。

確かに、唐代の古文運動に関係する作家は小説も書いている。古文運動の領袖である韓愈と柳宗元は小説に近い作品も自ら書いていた（とりあえず小説と呼んでおこう）。韓愈は《毛穎伝》、《石鼎聯句詩序》を書いているし、韓愈の《圻者王承福伝》をその中に入れる人もいる。柳宗元は《河間伝》を書いており、《種樹郭橐駝伝》もそうだと見なす人もいる。これらの文章は当然伝奇とはかなり近いものである。しかしながら、念入りに検討してみると、古文家の書く小説は、一般の伝奇作品とは結局のところ異なるのだ。その異なりは主に以下の点に示される。つまり、古文家の小説の主旨は教訓を説くこと、その思想を述べることにあり、言葉は典雅で簡潔であろうとする。これに対して、一般の伝奇の主旨は、面白みに富む物語を語り、物語を通して読者を感動させることにあり、言葉は華麗になり表現力の向上をめざしている。魯迅先生の《中国小説史略》第八編はこれに対するとともに良い説明である。

虚構の作品を作ることは、なるほど、晋代既に盛んであった。例えば、阮籍の「大人先生伝」、劉伶の「酒徳頌」、陶潜の「桃花源記」、「五柳先生伝」などがその類であった。しかしながら、皆寓言が主であつて、修辞は従であつたから、その系統が發展して王績の「酔郷記」、韓愈の「圻者王承福伝」、柳宗元の「種樹郭橐駝伝」等になつたわけであるが、伝奇物語とはかかわりが無いのである。伝奇物語の源流は、多分、六朝の怪異譚にあるが、さらに修辞に凝り、筋を複雑な曲折に富むものにしたから、その成果は、ずば抜けたものになつた。

このような区別から見ると、《圻者王承福伝》、《種樹郭橐駝伝》はもとより小説とは見なせないし、《毛穎伝》、《石鼎聯句詩序》も結局寓意を主とするので、一般の伝奇と同じように見なすことはできない。

*1 変文・俗曲：変文は、絵図を見せながら大衆に語る物語。俗曲は、民間で歌われた歌謡や歌謡による演劇などを指す。「遊仙窟」の成立については六朝期に流行つたとされる俗賦の影響が指摘されている。

以下に幾つかの例を再度挙げて伝奇と古文とに区別があることを証明したい。李肇《国史補》*1 卷下“韓沈良史才”の部分では以下のように述べている。

沈既済が書いた《沈中記》は、莊子の寓言のようなものだ。韓愈が書いた《毛穎伝》は、その文辞が非常に立派であって、司馬遷にも劣らない。二編とも良史の才能がある。

《沈中記》は中唐の伝奇の中では寓意を重んじ、文章も比較的素朴で簡潔、風格は韓・柳の古文と比較的近い、従って李肇の推賞を受けることになった。李公佐の《南柯太守伝》は《沈中記》と同じ主題だが、一層細やかで文彩に富む表現となり、伝奇の特徴をより明らかに示すものである。《国史補》では《南柯太守伝》にも言及はするが、その文辞は称賛していない。沈既済の別の伝奇作品《任氏伝》は、不思議な物語を描いて、文章表現もまた細やかで文彩に富むものだが、そこではやはり《沈中記》ほど重視されていないのである。

先に述べたように中唐の伝奇には対句がかなり多いのだが、これらの作法は古文の要求と相反するものだ。《陳後山詩話》*2 にいう。

范文正公が《岳陽樓記》を書いたおり、対語を使ってその時の光景を描き、世の人は皆すばらしいとみなしたが。尹師魯*3 はこれを読むと、伝奇体だ、といった。伝奇とは、唐の裴鏞が著した小説のことである。

ここにいう伝奇とは唐人小説を広く指し、裴鏞の著書*4 ばかりをいうのではない。范仲淹の《岳陽樓記》の中の写景表現は、対句を多用して、しかも概ね四字句なので、作り方は確かに唐代伝奇と非常に近く、従って古文家の尹洙に低く見なされることになっ

*1 李肇《国史補》：李肇は唐代長慶年間から大和年間頃（821～835）に朝廷に仕えた人物。開元から長慶年間の事柄が記される。

*2 《陳後山詩話》：宋の陳師道の《後山詩話》のこと。

*3 尹師魯：尹洙（1001～1047）のこと。師魯は字。宋代の人。歐陽脩と共に古文を唱えた。歐陽脩の墓誌銘によれば、博聞強記で古今に通じ、特に《春秋》に通じていたという。

*4 裴鏞の著書：所謂「唐代伝奇」の「伝奇」の語の由来は裴鏞の《伝奇》三巻にあるとされる。

た。古文家は簡潔を求めるから、《岳陽樓記》のような表現効果をねらった情景描写は、彼らに反対されるところとなったのである。柳宗元の山水遊記にはこのような飾った表現はない。中唐の伝奇の中で、沈亜之の《湘中怨辞》、《異夢録》、《秦夢記》は、文章は比較的簡約で飾りもない。これはまさしく彼が韓愈の門弟であったが故に、古文の影響を受けたためかもしれない。

二

伝奇と古文運動の関係に対して、陳寅恪先生は独自の見方をしている*1。鄭先生のように古文運動が伝奇に与えた影響を強調はせず、伝奇が古文運動の中で起こした作用を強調するのだ。陳先生の意見は彼の《韓愈と唐代小説》、《長恨歌箋証》、《説鴛鴦伝》、《新楽府箋証》、《論韓愈》等の文章に散見しているので、今その中の重要な論点を以下に取り出してみよう。

(一) “当時人間を描く叙事文は、極めて衰頹していた。” “敦煌の俗文学や日本に残された《游仙窟》などのように近年発見された唐代小説、及び洛陽出土の唐代非士族の墓誌などは、その著者は概ね当時の名高い文士ではない（張文成は例外）。しかもそこで用いられる文体となると、駢儷は既に陳腐化しており、たとえ散文でもまた極端に公式化されていて、人物の心情や姿及び世の習慣人の行為を描くには誠に堪えきれない状態であった。”（《長恨歌箋証》）

(二) この衰頹極まりない叙事文に対して、“改善を行なおうとすると、先ずは人間を描くには既に陳腐化してそぐわなくなった駢文を改めるべきであり、次に創造に有利な形式化していない古文に改めるべきである。とすると、その初めは試しにそれを実行してみることになる。しかしながら、碑文・墓誌・伝記の真実の人間の事柄を叙述する文章の場合、その文体には厳さがあり、試みに書いてみるという条件にはそぐわない。一方小説となると事実や作り事など混ぜ合わせて作ることができ、気楽な雰囲気では表現ができ、また雅俗ともに楽しめるので、試行に実に都合良くまた宣伝という条件も兼ね備えたものだったのだ”（《長恨歌箋証》）。韓愈の古文の場合、“先秦兩漢の文体を用い、

*1 陳寅恪（1890－1969）：1952年より中山大学教授。1955年以降は中国科学院哲学社会科学部委員を兼ねた。当時を代表する中国文学の研究者の一人。

唐代当時民間に伝わる小説を改め、硬直化し陳腐化し、人間を描くには適さなくなっていた駢体文を一掃しようとするものであり、その試みを行なって成功できたのである。従って、復古とはいうけれども、実は現在性を持っており、当時にあつては実際の状況によく適合したもので、文体の宣伝には最も有利なものだったのだ。”（《韓愈論》）“古文の盛り上りは、その時の古文家が古文で小説を作りうまくできたことによるものだと考える。古文は小説を書くのに最もふさわしいものだった。”（《長恨歌箋証》）

（三）当時このような新興の小説は、趙彦衛《雲麓漫鈔》にいうように、しばしば“その文には各種の文体をそなえ、そこには史才・詩筆・議論などを交えることができた”（《雲麓漫鈔》*1 卷八）。“韓愈の文集の中には小説に似た作品が非常に多い。《石鼎聯句詩並叙》及び《毛穎伝》が共にその例証である。前者は特に各種の文体をそなえ、そこには同時に史才・詩筆・議論がすべて現れている。”（《韓愈と唐代小説》）

（四）当時韓愈とともに古文体で小説を作ることを試みた者には、他に元稹、白居易などがある。“元稹、李紳は《鴛鴦伝》及び《歌》を貞元時代に書き、白居易と陳鴻は《長恨歌》及び《伝》を元和時代に書いている。趙氏がいうように挙人が科挙の審査者に献上した作品とはいえないが*2、まことに貞元、元和の時期に新しく興った文体である。この種の文体の登場と古文運動には密接な関係があり、その優れた所は創作に便利なことで、その特徴はとりわけ各種の文体をそなえた所である。”（《長恨歌箋証》）“当時古文に力を入れて変革を考えたものには、韓昌黎一派に限られるわけではなく、元稹、白居易の二人も当時復古を主張した優れた人物であった。しかし、その目標とする所はいささか違って、その影響もまた違いがあったのだが、その後煙没して目立たなくなってしまう。”（《説鴛鴦伝》）“白楽天が新楽府を作った時には、やはり《毛詩》や楽府古詩及び杜少陵詩の作り方を利用して、当時の民間に流行した歌謡を改善したが、実のところ貞元、元和時代の古文運動の巨人、例えば韓昌黎、元微之など、《太史公書》、《春秋左氏伝》の文体を使って《毛穎伝》、《石鼎聯句詩》、《鴛鴦伝》等の小説・伝奇を書いた者たちは、その創作の意図及び用いた方法が符合するのである。その違いといえは、一方は各種の文体をそなえた小説の領域内にあり、もう一方は純粹な詩歌の領域に

*1 《雲麓漫鈔》：宋の趙彦衛撰、事物の考証が多くを占め、その精確さで知られるが、過誤の例も指摘されている（《四庫全書総目提要》）。

*2 趙氏：先に出た宋の趙彦衛の《雲麓漫鈔》に記される、挙人が幽怪の記録や伝記などを科挙の審査官に送り文才を披露した所謂「温卷」の話を踏まえる。

あったというばかりなのだ。”（《新楽府箋証》）

陳先生の《元白詩箋証稿》等の論著は、非常に力の入った著作で、その中には多くの立派な見解があり、文学史研究の仕事には大いに役立つ。文中で、白楽天が“新楽府を作った時には、《毛詩》や楽府古詩及び杜少陵詩の作り方を利用して、当時の民間に流行した歌謡を改善した”と述べられるのも、白居易の新楽府が古今の創作特色を融合したものであることを示しえるものだ。しかし、この古文運動と伝奇の関係に対する視点については、私はどうしても賛成できない。黄雲眉先生が陳氏の視点に、なるほどと思う批判を出されたことがあったが*1、ここでは私個人の別の意見を以下に述べてみたい。

陳先生の最も重要な論点は、“古文の勃興は、その時の古文家が古文を用いて小説を試作し、そしてそれが成功できたことによってもたらされたもの”と考える所だ。この論点は事実上成立しえない。まず、古文運動の主要な理論と古文運動中における叙述文の位置づけからみたい。韓愈はもとより碑文墓誌を書くことに優れており、その文集には碑文墓誌も非常に多いのだが、古文運動の中心思想は儒教の道統を打ち立てて、仏教・道教を排斥する所にあった。従って、韓愈の《原道》、《原毀》、《諫迎仏骨表》等の論説文は、古文運動からすれば、さらに重要なアピール用の文書となるはずだ。《新唐書》巻一七六《韓愈伝》では、“韓愈は深くその根元を探り、立派に論を打ち立て、一家の言をなした。その《原道》、《原性》、《師説》等の数十篇は、皆興行きは深く広々として、孟子や揚雄と相補い合い、六経の助けとなっている。その文の言葉遣いには、前人の踏襲を求めようとしない”と述べて、《原道》等の論説文を重視するのは正しい。このような論説文を書くための準備として小説の試作があったとは考えられないこと、明らかである。また、《旧唐書》巻一六〇《韓愈伝》では、“大歴、貞元の時代、文章は古学を重んじるものが多く、揚雄や董仲舒の著述に倣った。獨孤及、梁肅が最も奥深いと称せられ、儒学者の重んじる所であった。韓愈はその弟子として学んだ。”という。論説を

*1（原注）《読陳寅恪先生論韓愈》（《文史哲》1955年第八期）を参照。

訳注：黄雲眉は当時山東大学の教授。この論文は、陳寅恪の韓愈研究に対して前半では思想の面から、後半では文学の面から検討を加え、陳寅恪の韓愈の古文と唐代小説との関係に対する考え方を批判して（王論文は概ねこの批判を引き継ぐ）、陳寅恪が古文や小説の勃興を科举制度と強く関係づけようとしたためではないかと述べている。陳寅恪が依った《雲麓漫鈔》の記事の検討や韓愈の古文制作の年齢からの論述への視点など、この訳出論文にもその影響が見られる。

つかつて儒教理學を宣揚すること、それこそが古文運動の先駆者の伝統である。韓愈の指導した古文運動の影響が大きく、多数の人からの擁護を受けたその理由として、最も重要な原因は、文章によって道を明らかにするという執筆理論を提示したことにより、そのため儒家思想の濃厚な多くの人々に対して強い動員力を持っていたのである。張籍は《遺韓愈第一書》の中で、“仕事に従事するものは、双六などの楽しみは捨て、虚偽を語らず、広々と天下の人物を受け入れ、孟子や揚雄の作を受け継ぎ、楊氏墨氏老氏釈氏の説を選び分けて、聖人の道を唐に再現すること、これが大切なことなのです”と述べていた。この言葉は、古文運動の擁護者たちが彼らの領袖へ寄せたこの分野での期待や熱心さを代表する。張籍は韓愈に“雑駁で虚偽な説”を捨て去ることを求めたが、それが小説を指すのだと見なすべき十分な証拠はない。しかし、韓愈が小説の試作によって古文運動を盛り上げようと考えたとしても、それは多くの人々の反対にあうであろうことは、十分予想できることだ。実際に、柳宗元の《読韓愈所著毛穎伝後題》の中では、《毛穎伝》を“変なものだと大いにあざ笑った”者がいたことが述べてある。

その次に、韓愈が書いた小説の時期から見えてみよう。陳先生はただ《石鼎聯句詩並序》と《毛穎伝》の二篇の文を挙げ、前者が各種の文体をそなえた佳作だという（実際は《石鼎連句詩並序》は叙事と詩歌があるばかりで、議論文はない）。しかし、《石鼎聯句詩並序》は元和七年（本文にははっきり制作年月が書かれている）に作られていて、この時韓愈は既に四十余歳、もはや古文の大家となっており、新しい文体を試みるような者ではなくなっている。例を挙げれば、彼の重要な文章、例えば《答李翊書》は貞元十七年に、《祭十二郎文》は貞元十九年に、《張中丞伝後序》は元和二年に作られていて、すべてそれ以前のものである（東雅堂本《韓昌黎集》を参照）。《毛穎伝》には制作年月の記載はない。柳宗元《読韓愈所著毛穎伝後題》の中で、“私は僻地にいたので、中央の人との文通はできなかった。南にやってくる者から韓愈が《毛穎伝》を書いたとしばしば聞いたが、その文辞を示すことはできず、変なものだと大いにあざ笑うばかりだった。ずっと読むことができなかったのだが、楊子誨が来るに及び、ようやくその書もたらされたので、借りてきて読んでみた”とあり、また《與楊誨之書》では、“あなたが将来した韓愈の《毛穎伝》は、小生には大変ユニークなものと思えます。”という。《與楊誨之書》は元和五年に作られている。柳宗元は永貞元年九月に礼部員外郎から南の辺境に左遷されており、柳宗元が朝廷にいた時にはまだ《毛穎伝》を見ていなかったのだから、《毛穎伝》が作られたのは、永貞元年から元和五年の間の数年間、つまり元和の

初め数年以内であって、その時期はやはり早くはない（呂大防《韓文類譜》を参照）。時間からいえば、韓愈がこの二編の文章を使って実験を試み古文運動の振興を導びこうとしたはずがないこと、これは明らかだ。陳先生は《韓愈と唐代小説》の中で“韓愈は小説について、早くから深い興味を持っていた。”というが、これは推測に過ぎず、確固とした証拠があるわけではない。韓愈に《毛穎伝》のような古文運動を振興するに十分な作品が早くからあったなら、その作品群は彼の文集の中にならずに編入されるはずだと私は考えている。

唐代中葉以後の伝奇は変文の影響を受けて、しばしば散文と詩歌を組み合わせた作品構成になっているが、しかし常にそうだというわけではなかった。趙彦衛の説の蓋然性は高くはないのだ*1。この点は黄雲眉先生が多く語っているので、ここでは述べない。陳先生は韓愈の《石鼎聯句詩並序》と《長恨歌》及び《伝》、《鴛鴦歌》及び《伝》が韻文と散文を組み合わせる点で似ているので、元稹・白居易が韓愈とともに小説を試作して古文運動を振興したと考え、元稹を“古文運動の巨人”と称しまでしたが、これは実に不適切である。元稹・白居易の政治文書は、その文辞が古めかしいのは事実だ。しかし、韓愈が提唱した“文章によって道を明らかにする”という古文とは根本的に違う。なぜならば、《新唐書》は力を入れて韓愈の文章を推賞していたが、白居易となると、“居易は元和・長慶の時期、元稹とともに評価されたものの、最も優れていたのは詩で、その文は称賛されなかった。”（卷一九《白居易傳讚》）からである。陳先生も元稹・白居易の主張は、韓愈が“重視する所とはいささか違っていた”と認めざるを得ないのだ。しかしながら、重要なのはこのような所ではなく、元稹・白居易と韓愈は同様に韻文散文を合わせた小説を作っただけでも、その風格が大きく異なることだ。韓愈の《毛穎伝》は、文辞は確かに簡潔で古雅、《史記》の表現法のような所がある。《長恨歌》及び《伝》、《鴛鴦伝》はこれとは異なり、叙述は細やかで、文辞は濃艶になる。《長恨歌》及び《伝》中には共に少なからぬ対句があり、《鴛鴦伝》中の“会真詩三十韻”はすべて律詩体である。韓愈の《毛穎伝》はまさしく古文で小説を書いたものだが、元稹・白居易の《歌》・《伝》となると当時の一般の伝奇の風格に類似する通俗化した作品なのだ。陳

*1 趙彦衛の説：科挙の受験者が審査官に送った幽怪の記録や伝記怪異の文は、その中に各種の文体を含んで作ることができるので、その文才を示すのに都合がよかったという説。

先生は元稹が《春秋左氏伝》の文体で《鴛鴦伝》を書いたと考えた。確かに、《鴛鴦伝》のいささかの語句、とりわけ鴛鴦が張生を批判する所は《左伝》に似ている（《左伝》本文は駢文と比較的に近い）。しかしながらこれはわずかな部分の現象に過ぎず、全体から見れば、《鴛鴦伝》はかなり通俗化された伝奇であって、《毛穎伝》と並べて論じるわけにはいかない。文辞は細やかで、通俗化され、内容に多くの情愛描写を持つこと、これが元稹・白居易の詩文（《長恨歌》、《鴛鴦伝》を含む）の特色であるが、この特色は韓愈・柳宗元の古文派が反対するものであった。高彦休《唐闕史》卷上*1に以下のような記載がある。“裴度が再度福先仏寺を修築し、高々とそびえる樓閣や、美しい階段や立派な額も、完成は間近になった。秘監の白楽天に書を送り、玉石に刻む文章を求めようとした所、ちょうどその場にいた正郎（皇甫湜*2）が、突如腹を立てていった。‘近くにいます私めを捨て、遠くにいる白居易に求めるとは、実に門下の者をないがしろにするものでございます。しかも、私めの文は、白居易の作と並べますと、玉でできた琴瑟であって、これに比べれば（白居易の文は男女密会を歌うような）桑間濮上の音であると考えます。かくなる上は、別の門下にお世話になりましょう。私めはこれより長くおいとまを乞い、退出したく存じます’。居並ぶ客はこの様子を見て、皆肝をつぶした。”韓愈の高弟の白居易の文章への評価はこのようなものだったのだ。陳先生は元稹・白居易は韓愈と同じ時期に小説を試作して古文運動を振興したと考えて、二つの異なった流れを一つに結びつけてしまった。それは歴史の真実の状況に適合するものではないのである。

唐代の民間文学、変文・俗曲等には対句がもとよりたくさんある。読んでみると不自然に思われる所もあって、表現性を妨げるものになってはいるけれども、しかし陳先生のいうように“陳腐化”までは到っていない。それは貴族文人が書く彫琢を重ねた駢文とは異なり、詰まる所やはり生氣に満ちた作品なのだ。前述のように、中唐の伝奇は、六朝志怪小説の伝統を引き継ぐもので、基本的には散文だが、しかし民間文学の強い影響を受け、対句の要素が増えて、言葉も一層通俗化している。《長恨歌》及び《伝》、《鴛鴦伝》がそのような作品だ。しかし、陳先生がいうように、“先秦兩漢の文体を用いて、

*1 高彦休《唐闕史》：高彦休は五代の人で、その書は他書からの抄録によってなるらしい。小説やでたらめの記事ばかりではなく考証の役にも立つという評価がある（《四庫全書総目提要》）。

*2 皇甫湜：憲宗元和元年の進士、韓愈に従って古文を学ぶ。

唐代当時民間に流行していた小説を改作した”ものでは決してない。本当に先秦兩漢の文体を用いて小説を書いたのは韓愈だけである。とはいえ彼のこのような作品は物語の展開を重んじるものではなく、寓意と文才の表現を重んじたものであって、中唐の小説の中であって、代表作だと見なせないことは明らかだ*1。陳先生の中唐伝奇の文体考察においては、唐代伝奇と漢魏六朝志怪小説との継承関係が疎かにされていることもやはり明白で、従って正確な結論を出せなかったのである。

劉開榮先生の《唐代小説研究》は、陳寅恪先生の見解に大きな影響を受けたものだ*2。書籍の中では唐代伝奇と古文運動の関係を専節を設け論じている。劉先生は多くの場所で陳先生の見解を採用しており、奇怪な主張もある。例えば、韓愈と柳宗元が“伝奇小説早期の大作家”（一章三節）だとか、“駢文の表現は簡潔だが抽象的で、散文表現は繁雑だが具体的であり、この二つを比べると、当然後者が現実生活を描写するのにふさわしい文体となる”（二章一節）という所などである。これは実際とは異なる。韓愈と柳宗元の小説は決して伝奇の代表作ではないし、変文俗曲は対句表現が多く言葉は繁雑で具体的であるのに対して、韓愈と柳宗元の散文表現は簡潔で抽象的なのである。劉先生は韓愈の小説には道を主張する用途もあったと述べてもいた。“そこに主張される道とは、時代を反映するものであり、教育意義を持った現実生活の‘大道’なのである。中国の小説が芽生えたばかりの時には、もう現実主義の道を歩み始め、ひな形を持ち始めた短編小説に、芸術の真正の使命を負わせたのだった”（二章一節）。この主張は、韓愈の提唱する堯・舜・禹・湯・文・武・周公・孔子・孟軻の儒家の道統と、現実主義をまぜこぜにして、極めて大胆だが全く根拠のないものだ。誰でも分かるこのようなこのような誤りについては、ここでつぶさに反駁するには及ばない。

*1 日本でも『唐代伝奇小説論』（小南一郎・岩波書店 2014・3）序論では、伝奇小説を「話」という語りの場を基盤に持つものとして捉え、「韓愈は毛穎伝を書き、柳宗元は種樹郭橐駝伝や童区奇伝などの文章を書いている。……しかしこれらの伝と伝奇小説の間にもまた、無視できない質的な差異が存在する」とのべており、韓愈や柳宗元の作を伝奇小説の代表作とは認めず、むしろ「小説とは呼びにくい」と述べる。

*2 劉開榮《唐代小説研究》（商務院書館 1947 初版・1955 修訂本・1956 第二版）：この書籍は曾西岡晴彦氏によって訳出されている（『唐代小説研究（その一）』熊本大学文学会『文学部論集』第3号 1981.2）。西岡氏が依られた原文は 1947 年版の旧版とのこと（第一回「はじめに」による）。西岡氏によれば、この論文は燕京大学歴史研究の卒業論文で指導教官は陳寅恪であった。その劉開榮氏が陳寅恪から受け継いだ古文運動に関する視点に関して、西岡氏はここで王先生が指摘した問題点には触れていない。

三

本文の結論を述べよう。

唐代伝奇の文体は漢魏六朝志怪小説の基礎の上に発展してきたものだ。その基本は散文だが、中唐の時代に、民間の変文や俗曲の影響を受けて、対句の要素が増加し、文章は通俗化に向かったのである。

中唐古文運動の盛り上がりは、伝奇の発展を促す動力になったものではなく、伝奇が古文運動の支流であったわけではない。古文運動も伝奇を試作して成功したがために盛り上がったわけではなかった。

中唐時代の古文運動の領袖韓愈、柳宗元及び幾人かの古文運動と関係のある人物が小説も作ったのは、この時代では小説を書くのが一種の流行であって、韓愈・柳宗元もこの流行の影響の下、手を出してしまったという所だ。一般的にいて、彼らの小説は寓意を重視し、文辞は簡潔古雅で、伝奇の代表作となるものではない。なぜならば、伝奇は物語の展開を重視して、文辞は細やかで濃艶であり、それは古文の風格とは対立するものだったからである。

1957年11月